

ひみつのかれん
外国人お姉さんキャラにたつ。ぶり愛されちゃう百合音声
特典用ミニシナリオ&ボイス集 台本

【もくじ】

- ①『【試聴用】「挨拶」』
- ②『【二年生の四月】初めて話した日（446文字）』
- ③『【二年生の七月】告白（321文字）』
- ④『【二年生の十月】ハロウイン（372文字）』
- ⑤『【二年生の十一月】本編の翌日（390文字）』
- ⑥『【二年生の十一月】秘密のアルバイト（658文字）』
- ⑦『【二年生の十二月】初めてのデート（491文字）』
- ⑧『【ちょっと未来】朝よ？（128文字）』
- ⑨『【ちょっと未来】早く帰ってきてね（194文字）』

計 3000文字

【内容について】

- ・本作は、本編を補完するミニシナリオ＆ボイス集です。主に、本編では描き切れなかつたエピソードを収録しています。また、本編では明かされなかつた設定が多数登場します。
- ・①は、公式ホームページにてすでに公開済みの音声です。
- ・②～④は、本編が始まる前のエピソードです。出会いからだんだん距離が縮まって、本編の状態になるまでを描いています。
※ト書きにネタバレがあります。本編鑑賞前に台本を読む場合は、同封のテキストファイル「セリフのみ台本」での確認をお勧めします。
- ・⑤～⑦は、本編より後のエピソードです。後日談として、本編よりさらに明るく楽しそうなカレンの様子を描いています。
※全編にネタバレがあります。ネタバレOKの方のみ、本編鑑賞前に台本を読んでください。
- ・⑧～⑨は単体で聞ける短いボイスです。カレンと一緒に暮らしている様子をイメージしてお楽しみください。

①『挨拶』

【明るく上品な雰囲気で。転校初日、クラスメートに自己紹介するイメージで】
初めまして。カレン・ラングフォードよ。

恵波（えなみ）の島女学院の二年生で、イギリスからやって来た留学生です。
【本人としては事実を告げているだけだが、淋しそうな雰囲気がにじむ】
そう……。ずっと、ずっとこの学校にいるの」

②『二年生の四月』初めて話した日（446文字）』

カレンの転入初日。

カレン、一刻も早く主人公と話したいと思っている。

カレン、昼休みになるなり、わき目もふらず主人公の席の前まで歩いていく。
主人公は自分が声をかけられるとは思わず、話しかけられるまで気づかない。熱心にノート
をまとめている。

「あの！」

【主人公が驚いて顔を上げる。初めて近くで目が合ったので、カレンも緊張して声が震え、
声がだんだん小さくなる】

「そう！ 貴方。貴方に話しかけてる、の。

【そこで初めて、自分は主人公のことをよく知っているが、逆はありえないことに気づく。
慌てて、午前中クラスの皆の前でしたにもかかわらず、再度自己紹介をしようとする】
あ、私転校生の……。

【「それはわかります……！」と言われ。「それはそうだった」と思った瞬間「主人公と最初
に話すときはこうしよう」と事前に考えてきたセリフが全部飛ぶ。もつとうまくやるつもり
が、緊張のあまり全然話せなくなってしまう】

あ、それは知ってるわよね。そうよね。

えっと……。あの、ね？ これからお昼だから……。

【絞り出すように。当然、知つていて聞いている】

食堂の場所を教えていただきたいのだけど……。

【主人公は、転校初日から美人で目立つカレンが、自分のような地味な存在に声をかけてきた
ことが信じられない。カレン同様緊張しており、なぜか敬語で「私でいいんですか……？」
と聞いてくる。カレン、深く頷いて答える】

うん。

【緊張で一瞬間に空く。なるべく自然に聞こえるようにしているが、内心ドキドキしている】

貴方がいいの。

【主人公が目を白黒させているので、やはり唐突だったか。と思い、声が震える。今更ながら、自分の立てた計画の甘さに呆れてくる】

貴方にお願いしたいの……。

【しかし「私で良かったら……」と言われ。今度は嬉しさで声が上ずる。クラスがえがあつたので、まだ教室内でグループはできておらず、主人公も特定の友達はない】

あ、いいの？　ありがとう！　よろしくお願ひするわ！

【主人公が慌てて勉強道具をしまい、立ち上がる。一緒に歩き出そうとすると、主人公が、朝から感じていた違和感を指摘する。主人公「……もしかして、足が？」と遠慮がちに聞く】

あ、ごめんなさい。そうなの。

私、少しきなが悪くて……。

杖が必要なほどではないのだけど。あまり早くは歩けなくて。

【主人公、カレンを気遣うあまり「じゃあ、つかまってください！」と腕を差し出す】

えつ？　……いいの？

【しかし、主人公は『やつてしまつた』『いきなりこんな申し出をするなんて、距離が近すぎた』という調子で青くなる。すぐさま「ごめんなさい！　差し出がましいことを……」と今度は真っ赤になりうつむいてしまう。一方、カレンは内心舞い上がっている。やはり主人公は自分の思つていた通りの人だと感じる。嬉しさのあまり、一瞬間が空く】

ありがとう……。

【強く否定する】

ううん！　差し出がましくなんかないわ。嬉しい。

お言葉に甘えて。腕につかまらせてもらつてもいい？

ありがとう。貴方つて優しいのね。

親切な方と知り合えて、私安心したわ。

【小声でぼそつとひとり言。素が出る】

というか……思つてた以上に素敵なんだけど……。

【主人公に「どうかしました？」と聞かれ。咳払いして慌てて】

何でもないの。

それより……どうして敬語なの？

【距離を感じて淋しくなつて】

私たち、同級生よね。できればかしこまらないでほしいのだけど……。

【主人公が「ごめんなさい！　ああ、違う……つ、ごめんね！」と言つたので】

うん！　そうしていただける？

【とにかくこれが言いたかった、という調子で】

あと。私のことは『カレン』って呼んでくれる？

【主人公がドキドキしつつも「わ、わかつた。カレン……？」と呼んだので】

ありがとう！

ふふ……これから、よろしくね！

貴方と一緒になら、私、とっても楽しく過ごせそう

＊＊＊

③『二年生の七月』告白（321文字）』

間もなく夏休み。

主人公とカレン、放課後、敷地内の森林公园を並んで歩く。

二人はすっかり仲良くなっている。

すでに、お互いに相手を友達以上に想つていて、相手もそうであることは知らない。カレン、夏休みは完全に校内から姿を消し、帰国している体で過ごすことに決めている。そのため、主人公は夏休みカレンと一緒に過ごせないことを知り、淋しく思っている。主人公は、カレンのイギリスでの様子が気になってしまふがいい。

恋人がいるのか確かめたいが、怖くて聞けずにいる。

それを知らないカレンは、顔に手をかざし、まぶしそうに顔にかかる太陽光をささえぎる。

「暑くなってきたわね。
お話しでなあに？」

【「カレンは、夏休みイギリスに戻るんだよね……」と切り出され。実際は嘘で、これまで通り図書館に引きこもる日々なので、ぎくつとする】

うん。そうなの。夏休みの間は、一時帰国させていただくわ。

【カレン自身、残念でならない。内心「なぜこんな嘘をつかなくてはならないのだろう」と思つていて】

だから、暫く会えないわね。

【主人公、『カレンには恋人がいる』という前提で質問すれば、あまり傷つかないし、自分の気持ちを悟られる可能性も低いと感じる。そのように訊く】

えっ？『お付き合いしている人には会つたりするの？』って……。

【強く否定する。実際は「いたことがない」なのだが、もてない女と思われるのもしゃくなので、言わないことにする】

いないいない！ いないわ！

【「しどろもどろになる】

そんな人はいません……！

【「じゃあ、好きな人はいる？」と聞かれ】

カレン、自分の正体のことなどは抜きにして、なるべく誠実に応えようとするが、彼女自身自分の気持ちを測りかねていて。

まだ「自分は主人公に恋している」「主人公が好きだ」と断言するには弱いような気がしている。

主人公に会うまでは、自分の恋愛対象は男性だと思っていたし、今も自分の嗜好が明確に変わった実感はない。

今はただ主人公と一緒にいるのが楽しくて、幸せ。「今後もっと深い関係になりたい」というよりも、「楽しい今を失いたくない」という気持ちの方が強い。

だから、絶対に両想いになりたいわけでもない。

そもそも自分は、芳しくない状況にある自分を変えるきっかけが欲しくて、主人公に近づいただけのような気もする。

「そのきっかけを与えてくれる相手であれば、主人公でなくてもよかつたのでは?」「毎日に刺激が欲しかつただけでは?」

と聞かれれば、否定するのは難しい。

ただ「いてもたってもいられなかつた」「今まで終わりたくなかつた」という気持ちだけはあつた。

自分から行動しなくては、主人公はずっと自分を認識することもなく卒業していった。それだけは看過できなかつたからだ。

つまり「主人公のことが恋愛対象として好き。恋人になりたい」というよりは「どんな関係で終わつてもいいから、とにかく主人公に自分の存在を知つて欲しかつた」というのが最も近いのでは、と感じる。「現状を変えたかつた」という目論見があつたのも認めた上で、正直に告げる。

「好きな人は……わからない。

【絞り出すように。実質的な告白】

ただ、私は、貴方というのがとても楽しい……。今みたいな幸せが、ずっと續けばいいって思つてゐる。

【複雑そうに。「私もだよ。カレン」とするのが一番楽しい。学校生活がこんなに楽しいなんて、カレンに会うままで知らなかつた】と言われ。嬉しいが、一方で『これは友人として言われているのだ』と思うとなぜか胸が苦しくなる。自分の気持ちを決めかねているくせに、主人公に友人扱いされるとひどく傷つく】

貴方も? 本当に私たち、一緒にね。すごく嬉しいわ!

【しかし、「ううん。一緒にやないと思う。私はカレンと同じ気持ちじゃない」と言われ急に不安になる。主人公が何を言おうとしているのか見当がつかない】

え? 『一緒にやない』ってどういうこと?

【私はカレンが好き。新学期の日、話しかけてくれた時から、ずっとカレンのことが気に

なつてた。一人の人として、カレンのことが誰よりも好きです」と突如言われる。主人公自身衝動的に発した言葉なので、お互いどうしたらいいかわからなくなる】

えつ? あ……あ……そう、なの……?

貴方が……私を……?

本当……本当に?

【「急に言われて、嫌かもしれないけど。友達にこんなこと言われても、困るだけだつてわかつてること……」と言われ。強く否定する】

嫌じやないわ! 困つてなんかない!

【そこで、主人公の「一人の人として、相手のことが誰よりも好き」という言葉が腑に落ちる。難しく考えるあまりわからなくなっていたが、それは自分も一緒だ、と感じる】

私も一緒よ。貴方のことが好き……。

そう。一人の人として、貴方が大好き。

【嬉しいが、自分の正体のことを考えると絶望的な気持ちになる。思えば、自分は「人間」ではない。しかしここで自分が困ったような対応をすると誤解を与えると思い、「嬉しい」だけを表現することに決める】

そうよ。私たち、つまり。

【『両想い』を特に嬉しそうに】

両想い、みたい……】

④『二年生の十月』ハロウィン（372文字）』

秋。主人公とカレンは、すっかり周囲の公認カップルになつてている。

特に特別視されることもなく平和に過ごせているのは、二人の人柄と、おつとりした校風も大きい。周囲は「そもそも、そこまで珍しいことでもない」という認識の様子。

ハロウィンの日、恵波の島女学院では、文化祭の前夜祭としてハロウィンパーティを行う。校内は仮装した女生徒たちでごつた返し、マイクが特技のカレンは、クラスメートたちにお化けメイクを施している。

主人公、カレンに会うため、メイクルームに使つてている教室の扉を開く。中には吸血鬼の仮装のカレンがいる。

カレンは座つたまま、主人公は立つて話す。

「はい! 次はだあれ?

あれ?

【嬉しそうに。自分はイベントことが大好きだが、主人公は苦手だろうと思っていた。そのため、今日はほとんど会えないと思っていたが、予想に反して主人公が自分のところへ来て

くれたのが嬉しい】

意外だわ……貴方はこういうイベントごと、苦手と思つていたから。
でも嬉しい。

貴方も私に、ハロウイン用のメイクをしてもらいに来たのね！

【カレンのメイク、すごく好評だよ。みんな人間だったのがゾンビになつて出てくるから、『感染源』って呼ばれるよ】と言われ
え？　ここ『感染源』って呼ばれてる？

入った生徒が皆ゾンビ化して出てくるから？

【一瞬絶句するが、「言い得て妙だな」「スキルは褒められている」と納得し、素直に感心して】
……うまいこと言つてくれるじゃない。

【自慢げに】

そんな私の仮装？　ふふ、吸血鬼よ！　なかなかいいでしよう。

【冗談めかして楽しそうに】

皆の血を吸つて、仲間にしちゃうから。

【「カレンと一緒になら、それでもいいよ」と言われ。「主人公と同等の存在になれたらいいのに」という自虐的な冗談のつもりだったが、主人公がどこか真面目な口調で言うので、まさかとは思うが、自分の正体を察し始めているのではと感じる。冗談っぽく聞こうとするが、内心ドキドキしている。自虐的に「化け物」を強調する。「吸血鬼」と言わないことでかまをかけようとしている】

「それでもいいよ」って。いいの？　化け物の恋人で。

【カレンの予想通り、主人公はカレンの正体を薄々察し始めている。ここは強く「いい」と言わなくてはならないと感じ取り「いい！　人間じゃなくても大丈夫！」とはつきり言う】
あ、ありがとう……。

【このままでいると泣き出してしまいそうなので、「そんなにこの格好が気に入つたの？」と冗談を言つて空氣を換えようとする】

なあに？　貴方つてば、そんなにこの格好が、

【言いかけたところで、ふいに主人公が抱きついてくる。予想外のことなので、非常に驚く。主人公がこんなことをして来るのは露も思わなかつた】

あつ……??

【しばし沈黙。内心、嬉しくて泣きそうになつていて。もしかすると、主人公はすべてを知つた上で、それでも自分と一緒にいてくれているのでは、と期待してしまう】
あの……えーと……。

抱きしめられていると。メイク、できないんだけど……。

【どんどん恥ずかしくなつてくる。お互に顔が見えないまま、主人公の服を握る】
こんなところ見られたら……。

また皆に「バカツプル」って言われちやうわよ……。

【それでも主人公が離さないので、観念する】

もう……。

【しばらく間を置き。主人公であれば、自分の正体を告げても、受け入れてくれるのではと感じる。心からお詫を言う】

ありがとう……。

あのね。いつか必ず……必ず、すべてを話すから。

その時も今と同じことを言ってくれたら……嬉しい……】

⑤『二年生の十一月』本編の翌日（390文字）』

本編の翌日（正確には本編一日目の昼休み）。

主人公とカレンは、あの後どうにか食堂に紛れ込み、何事もなかつたかのように午前の授業を終えながら。

朝「昼休み、改めて今後について話し合おう」と約束した二人だったが、いざ会うとお互いに昨夜のこと思い出して意識すぎてしまい、まるで会話が続かない。

【本編ではなかつたほど、がちがちに緊張して】

えつと、あの。やつとお昼休みになつたわけだけど。

【緊張のあまり早口】

あれからお加減はいかが？ 私はこの通り平氣。まだ足軽いの慣れないけど。

【私も大丈夫。すこく元氣。でも、正直午前の授業は手につかなかつたかも……。カレンのことばっかり考えていたよ】と言われ。ひとまず主人公の体調に問題はないことに安堵する】

本当？ 良かった……。

私もよ……。

授業なんて手につかない。ずっと、昨夜のことばかり。貴方のことだけ考えてた……。

【一瞬ロマンチックな雰囲気になるが。よく考えたら自分のそれは今に始まつたことではないと気づく。主人公に隠しことがなくなつたので、途端に口が軽くなっている。やや間を置き、自分自身につっこみを入れるように】

いや私いつもそうね？ この学校の授業なんて正直飽き飽きよ？

【落ち着こうと一呼吸置き】

えーっと、そうじやなくて。

これからのことなんだけど。

私が、貴方に会うままでどう過（）していたかとか……。

私が学校生活を送れるよう助けてくれていた……私の正体を知る唯一の人。
この学校の学院長のこととか。

※「恵波の島女学『院』」なので「学『園』長」ではなく「学『院』長」になります。誤り
やすいのでお気をつけてください。

順を追つて、貴方に話したいって思つてるの。
驚くこともあるだらうし……。

私、貴方の前では相当格好つけていたから。

素の私を知つて、がつかりすることもあるかもしれないけど……。

変わらず一緒にいて、くれる?

【「もちろん！みんな話してね。カレンのこと、私何でも知りたいから」と言われ穏やかに。これまでならもつと大きさなりアクションになっていたが、昨日の件で信頼が芽生え、主人公ならそう言つてくれるという確信があつたので驚かない】

うん。ありがとう。嬉しい。貴方ならそう言つてくれるつて思つてた。

【幸せそうに】

ふふ。私たち。これからやることたくさんね？」

⑥『【二年生の十一月】秘密のアルバイト（658文字）』

「あ、いたいた！」

あのね。週末の

【『デート』というだけでテンションが上がつている】

デートの話なんだけど……。

私、映画館に行ってみたいの！

【「カレン、映画好きだもんね！」と言われ。実はホラー映画マニアなだけ、あとはファンションや画面が可愛い映画を観る程度のミーハーなファンなのだが、知られると格好悪いので、隠して話す】

そう！　映画、好きなんだけど……。

いつも図書館で、見てたから。

【「そうだ、これは言つておかないと、という調子で】

そうだ。お金のことなら安心してね。

実はね、私。アルバイトしてたの。もうやめちやつたんだけど。

【「知らなかつた！　何のお仕事？」と聞かれ。ちょっと得意げに】

警備員！

織江（おりえ）……

【と言つても、主人公には誰のことかわからないな、と気づき】

学院長の勧めでね。

【織江の口調を真似て、ちよつと意地悪に言う】

『どうせ暇なんだから少しは役に立て』

つて言われていたわけ。

だから、透明になれるのを活かして、夜間見回りをしたり……。

授業中や休み時間の様子を覗いて、トラブルの有無をチェックしたり。

それを報告して、アルバイト代をもらっていたの。

スマホもタブレットもそれで買ったし。

だから、お金には困っていないから。

【ぼそっと小声で】

何十年もやってたし。

【自分としては、結構頑張ったな？】と思つてている。主人公と出会うまでも、別に遊んで暮らしていたわけではない。自分は警備員であり、決して自宅警備員ではない。と強調したい】

当時は、どうせ学校から出られやしないのに、お金なんか貯めてどうするのよつて思つてい

たけど……。今は、やっておいてよかつたと思うわ。

【主人公に自分の働きぶりを自慢したくてしようがない】

それに私、結構役に立つていたと思うのよ。

【主人公が申し訳なさそうに「あの……もしかしてそれって……」と切り出すので】

うん？ 何か思い当たるつて顔ね？

へ？ この学校に伝わる七不思議？

うんうん。

昼間でも開けっぱなしのドアが勝手に閉まるとか。

深夜の図書館でパソコンがひとりでについて、怖い映画が再生されるとか。
落とし物が突然ブカッと浮いて飛んでいくのが目撃されているとか……。

【平坦に】

あーそれ私ね。私じゃなかつたら怖いわね？

【主人公がとても申し訳なさそうに、しかし『言わねばならない』という調子で、「怖がられてるみたいだよ……怪奇現象だねつて……』と言うので】

あ。実際怖がつてる。貴方がすんなり私の正体を受け入れたのも、その噂があつたから？

【……】でようやく気付く

え？ てことは？

何それ。私怖がられてたの？ えーっ？

【ショックでしばし間が空く。ハッと我に返ると、必死で自己弁護をする】

でもね。それらは全部、善意のつもりで……。

【ショックでまたしばし間が空く】

私はどちらかというと……

【可愛く】

『学校の守護神』？

そういう感じのつもりだったのに！
怪奇現象なんて、あんまりよ！」

⑦『【二年生の十二月】初めてのデート（491文字）』

「【ぼそっと早口で。※マークまで「怖い話体験談」のようなノリで】
ええ。出来心だったの。今は反省しているわ。本当よ。

ちよつと驚かせたかっただけなの。だつて貴方、最近ますます格好いいし。
なんかそれって悔しいし。

だからちよつといたずらしてやろうって思つただけなの。

【一呼吸置き。悲痛に】

なのに、まさか。初めてのデートがこんなことになっちゃうなんて……。※

【芝居がかつたコミカルな雰囲気で】

ああ！ もつと早く気づくべきだったわ。思えば貴方、明らかに引きつっていたし。
私が無類のホラー好きだから、怖い映画に付き合つてくれただけ。それを理解すべきだった。
【特に誰も聞いていないが、言い訳を始める】

【ぼそっと早口で、突然のろけだす】

でも、貴方って、とても感受性が鋭いし。非現実的なこともすんなり受け入れちゃうし。

まあそこが好きなんだけど。ていうか大好き。

【一呼吸置いて。特に誰も聞いていないが、再び言い訳を始める】

とにかく。だからいけるかな？ って思ったのね？

だから私、つい言つてしまつたの。スクリーンに現れたあの巨大なお化けを見て……。

【芝居がかつた口調で大げさに。耳元で囁くように】

『あれって、実在するのよね……

【いたつて真面目に、ある靈感タレントのものまねをする】
やだなあ……怖いなあ……』

【声のトーンががらつと元に戻る】
って。

【一呼吸置いて。特に誰も聞いていないが、みたび言い訳を始める】
でもね？ まさかそう言つただけで。

貴方が真に受けて、泡を吹いて倒れちゃうなんて思わないじゃない？

【心底いたわしい、という調子で。芝居がかつた大げさな雰囲気で】
ああ……！

【映画館の医務室で、ぐつたり氣を失っている主人公の横で叫ぶ】

お願い目を覚まして！『ごめん嘘！あれ偽者！あんなのいない！

【早口でまくし立てるように】

お化けはこの通り実在するけど少なくともさつき見たのはフェイクよ！

幽霊歴の長い私を信じて！起きてー！

＊＊＊

⑧『【ちよつと未来】朝よ？（128文字）』

※本編のトラック1とトラック7に比べ「より親密」「気安い」感じを意識してお願いします。

【優しくゆっくりと】

おはよう。朝よ。もう、起きる時間。

【主人公が「ありがとう……おはよう……」と、よろよろと体を起こしたので満足げに】
うん。

【主人公の髪の寝癖に気づき。主人公に該当箇所がわかるように自分の頭を使つて指さす】
あ、ここ寝癖。

【思つたより寝癖がひどいので、思わず笑ってしまう】

すごい。

ちゃんと直すのよ。
【「えーっ、そんなにひどい？どうしよう……」と主人公が慌てているのがおかしくなり。少し間を置いてしみじみと】

ふふ……なんだか、こういうのっていいわね。
朝起きたら、好きな人が隣にいる、って……。

【楽しげに。からかって】

今は寝癖に困つてらっしゃるけど

【照れくさそうに。自分で言つておいて恥ずかしくなつてくる】

ふふふ。

【寝癖に慌てふためいていた主人公とふと目が合い、主人公が自然に顔を寄せてキスして

きたので】

ん……ちゅつ。

【自分たちも付き合いが長くなり、自然な関係になってきたのを実感して嬉しくなる】

ふふい。

今日も一日、頑張りましょうね?」

⑨『【ちょっと未来】早く帰ってきてね（194文字）』

※実際に電話で話している感じを意識して、特別ゆっくりめにお願いします。

【夜、なかなか家に帰つてこない主人公から電話がかかってきて。先ほど自分がかけたときはつながらなかつたので、安堵する】
……もしもし？ よかつた、つながつて。

【優しく、ゆっくりと】

どうしたの？ 今、どこにいるの。まだ帰つてこられなさそう？

【電話するのが遅れてごめんね。ちょっと嫌なことがあつて……ごめんね。外で、頭冷やしてた」と言われ。主人公が自分に愚痴を言いたくないがために、一度落ち着こうと外で時間をつぶしていたことを察する】

うん？ そうだったの……。辛いことが、あつたのね。

【これまで頑張つてきたつもりだつたけど、自信なくなつちやつた。私いけなかつたのかもしれない。努力してるつもりなだけの、だめな人だつたのかもしれない」と言われ。自分なりにカレンに頼るまいと努力したもの、結局弱音を吐いてしまう主人公がいとおしくてしようがない】

自信なくしちやつたの？ 珍しいわね、弱音。

【なんと言つて励まそつか、考えて間を置いてから】

でも、私は早く貴方に会いたいけど。

もし貴方が……貴方の言う通り、だめな人だつたとしても……。

私は貴方が居てくれるだけで、本当に幸せだから。

【「ありがとう……」と電話口ですり泣く声が聞こえる。我慢していたのに、結局泣き出してしまう主人公を可愛いと感じ、思わず微笑む】
ね？ だから、早く帰つていらつしやい？
暖かいもの用意して、待つているから】